

種別：無形民俗文化財（風俗慣習等）

（登録）

名称：北白川天神宮の剣鉾差し

保存団体：北白川伝統文化保存会

保存団体所在地：京都市左京区北白川

適用基準：第2－4

説明：

左京区北白川（かつての愛宕郡白川村）は、比叡山を水源とする白川の谷口集落で、京都と近江を結ぶ志賀越（街道）に沿って旧集落が形成される。産土神である北白川天神宮の氏子の旧家は、家筋によって壱ノ鉾仲間、弐ノ鉾仲間、参ノ鉾仲間のいずれかに所属し、それぞれが剣鉾を護持している。

剣鉾とは、祇園祭の山鉾と同じく、御靈信仰に基づく祭礼が母体であり、神輿渡御を先導して淨める役割を持つとされる。剣鉾は、近世期に昇鉾、曳鉾など多様化したが、中世以来の差鉾による剣鉾差しは、剣鉾行事の典型として、現在も市内各地で行われている。また、差鉾を差す技術をもつ「鉾差し」を輩出する地域は、鹿ヶ谷から一乗寺にかけての東山山麓、嵯峨祭の氏子地域、梅ヶ畠・高雄などであり、それぞれ差し方に特徴がある。

北白川天神宮の秋季大祭は10月上旬に行われる。第1土曜日に若中会が提灯を立て、その日から翌日曜日にかけて高盛御供の調製及び献饌がある。その後、水曜日に鉾立て、木曜日に神幸祭、そして第2土曜日に若中会が神輿巡行の準備をし、翌日曜日に還幸祭を迎える。

鉾立ては、早朝から各鉾仲間が時間差を設けて、剣鉾部材一式を御旅所の神輿倉から各鉾仲間の当屋に運ぶ。当屋では「天神宮」の神号軸を中心に祭壇を組み、剣鉾は玄関先に支持台を設けて立てる。神幸祭の日は、午後3時頃、本殿から御旅所の神輿に御神靈を遷す。還幸祭の日は、午前10時頃から各鉾仲間の当屋で、御膳と御神酒をいただく サンコウハイ（三交杯）があり、三献の儀が行われる。盃を回す度にサンヤレを唱えて祝う。午後、剣鉾1基（鉾仲間の輪番）を先頭にした行列が、氏子地域を一巡する。行列の次第は、剣鉾、太鼓、大神輿、女性太鼓、女性神輿、子供神輿、子供白川女、稚児行列、神

社役員、騎馬宮司などの順である。

壱ノ鉾仲間には、茎に延喜8年（908）の陰刻がある黒鉾があり、後小松天皇から下賜されたものと伝え、地元で大切に扱われてきた。剣鉾の鉾頭の剣は、いずれも真鍮製（もとは金銅製）で薄造りの剣であるが、この黒鉾の肉厚の鉄製であることから、剣鉾として製作されたものとは考えられないが、剣鉾差しの象徴として、祭りの間は壱ノ鉾仲間の当屋の祭壇に飾られる。

一条兼良（1402-1481）の『尺素往来』に、祇園会に「白河鉾」が出たことが知られるが、その形状は不明であり、剣鉾の源流であるかどうかは検討の余地がある。一方で、地元では聖護院の退隠所である照高院に住した後陽成天皇の皇子・尊晃法親王（1612-1679）が、鉾祭りや高盛御供など、村の年中行事の祭式を整えたと伝える。壱ノ鉾仲間・参ノ鉾仲間の神号軸は尊晃法親王の筆によるものとされ、鉾仲間の成立も寛文年間（1661-1673）と伝えられている。

北白川天神宮の祭礼は、貞享3年（1686）の『雍州府志』卷二に白川天王の祭礼は8月13日に行うとある。延宝4年（1676）の黒川道祐著『日次紀事』の9月13日の項に「北白川東天王祭リ〈有_二神輿一基鉾五本〉」とあり、天

明7年（1787）の秋里籬島著『拾遺都名所図会』に「北白川天満宮 白河村南

の方にあり 土人生土神 とす、 例祭 は九月十三日、 神輿 一基、 鳥居 の

額、 道晃法親王御筆也、 摂社ハ山王春日八幡宮」とあるが、社伝では神幸祭が9月10日、還幸祭が9月13日であったとする。明治以降、ひと月遅れの同日となった。明治19年（1886）の『愛宕郡各町村沿革調』に5反ほどの鉾田と、三基の鉾と十六名ずつの組合という現在同様の祭祀組織が確認できる。

その後、愛宕郡の秋祭の日程が統一された際、10月20日・23日、昭和47年（1972）から10月7日、10日（体育の日）となった。そして、体育の日が10月第2日曜日となった平成12年（2000）に、現在の日程になった。

各鉾仲間に伝わる祭具で年代のわかるものとして、壱ノ鉾仲間の吹散は、箱蓋裏に「奉寛政元年己酉九月」と墨書がある。弐ノ鉾仲間の剣の茎には「明暦丙申（1656）八月十三日」の陰刻があり、剣は箱蓋裏に「文政十三寅九月」の墨

書がる。参ノ鉾仲間の鈴は、箱蓋裏に「寛政七年 卯歳九月十三…」と墨書があり、神号軸箱の蓋には「二品雄仁親王御染筆／天神宮御神号」「嘉永六年 八月表装」とある。雄仁親王（1821-1868）は伏見宮邦家親王の王子である。

各鉾仲間では、男児が生まれると帳面（背中別（せなかびつ）帳とも）に氏名を記載する。これをマジリコ（交じり子）といい、およそ10～15歳になると、秋季大祭の際にトウニンを務め、その家を当屋に定める。昭和30年頃までは、トウニンを務めるまでに鉢スリ、剣鉾の吹散持ちを経験することになっていた。神輿巡行は戦中から昭和26年（1951）まで中断や居祭の時期があった。また、昭和44年（1969）から神輿と剣鉾をトラックに載せて巡行していたが、昭和57年（1982）に神輿を新調して巡行が復活し、同時に剣鉾差しも復活した。北白川では、鉾差しは長く一乗寺から呼んでいた。吹散は袴姿のトウニンが持つて歩いたという。その後、平成★年（19★）頃からは、他所からの鉾差しに交じって北白川の有志も加わるようになった。そして、平成★年（19★）頃以降、北白川の鉾差しを中心に、東山系の鉾差しが協力する現在の体制となった。

北白川天神宮の剣鉾差しは、鉾仲間によって剣鉾が護持される京都の剣鉾行事の典型例のひとつであり、近世初期に現在のような鉾祭りの型式が整えられていたと考えられる。また、サンヤレの儀礼は、吉田や一乗寺など東山麓の鉾祭りにもみられる地域的特徴も有する。昭和30年頃までは、鉾仲間の少年が鉾の吹散を持ちを務めるなど、鉾差しとの接点もあり、東山系の鉾差しとの交流が続いていたが、現在は地元住民から鉾差しを輩出するまでになった。これらのことから、北白川天神宮の剣鉾差しは、京都における代表的な剣鉾差しの行事のひとつとして、重要なものといえる。

〈参考文献〉

宇野日出生（2008）「北白川の村落構成と祭祀組織」『京都市歴史資料館紀要』22号
京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編（2016）『京都 剣鉾のまつり調査報告書』